



# 日吉の森 季刊誌(春)

2015年3月20日  
第1号

日吉の森庭園美術館, 223-0064 横浜市港北区下田町 3-10-34  
Hiyoshinomori.com hiyoshinomori@hb.tp1.jp 045(561)3214

## この号の内容

- 1 はじめに
- 2 日吉の森庭園より  
～野生植物の状況～
- 3 田辺光彰美術館より  
～道具と精霊～  
終わりに

---

小さな子供がバッタと出  
会った時に見せるあのキ  
ラキラとした目

---

## 1 はじめに

副館長 田邊 美紗代

2014年11月16日(日)にグランドオープンしました、「日吉の森庭園美術館」の最初の研究報告誌となりますこの紙面の冒頭の言葉として、この場を借りて当美術館の理念を明示させていただきます。

“日吉の森庭園美術館は、その事業を通じて、物の大切さ自生種(生物多様性)の素晴らしさや重要性を紹介し、環境について、感じ、学び、考える場を提供していく。”

上記の理念に則り美術館を運営していき、地域社会に貢献していくことが、当館の使命だと考えております。

博物館法には資料の保存、収集、展示、研究がその勤めとされています。その研究の発表の場の一つとして、この季刊誌を作成いたしました。

## 2. 日吉の森庭園より～野生植物の状況～

副館長 田邊 美紗代

美術館開館以前から私は“松の川緑道の会”代表として20年に亘りその保全活動を行っています。松の川緑道とは、神奈川県横浜市港北区の日吉駅と高田町を結ぶ全長2.1Kmの松の川を暗渠としてふたをしその上を遊歩道としたものです。野ボケ・クヌギ・ウグイスカグラ・エゴノキ・ユキノシタ・エビネ・ホトトギス・ヤブラシ・シラン等の自生していた野生植物が植えられ始め、現在まで良好な形で維持されています。

会の方針として次のような考え方に基づき保全活動を行っています。野生植物(雑草・雑木)は多くの昆虫が身を守る棲み家であり、大事な食べ物であり、生きた鼓動を聞くことの出来る環境をつくり上げるものです。が、この周辺でも都市化の中で激減しています。

(小さな子供がバッタと出会った時に見せるあのキラキラとした目) 私たちは今、この激減してきた野生植物に注目し、保護しなければならないときに遭遇しています。

自然のありのままの様相を楽しめるこの「松の川緑道」こそ、私たちの「たから」

人間の好みだけで、多くの生物を育てる野生動物を忌み嫌っては取り返しのつかない事になることも分かり始めてきたと思えます。この「生物多様性」こそ、重要な「生きる環境」だと確信しています。

大都会の中で、四季折々、自然のありのままの様相を楽しめるこの「松の川緑道」こそ、私たちの「たから」なのです。

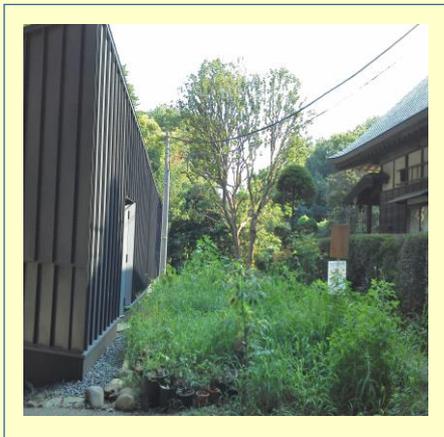
このような考えの基に、私たちの会では「野生植物と野生小動物を復活させ保護する」という緑道(遊歩道)として日本でも先駆的な試みをしています。

当美術館でも上記理念を適用していますので昨年から庭園内で野生植物の生育状況また、蝶の食草の自生など調査を行ってきました。

### ＜昨年育った野生植物＞

ハハコグサ 母子草  
 オオブタクサ 大豚草  
 イヌビコ 犬菟  
 ケアリタソウ 毛有田草  
 ヨウシュヤマゴボウ 洋種山牛蒡  
 イタドリ 虎林  
 チチコグサ 父子草  
 チチコグサモドキ 父子草擬き  
 タチイヌノフグリ 立犬の陰囊  
 オオイヌノフグリ 大犬の陰囊  
 キツネノマゴ 狐の孫  
 ハエドクソウ 蠅毒草  
 オオバコ 大葉子  
 ハキダメギク 掃溜菊  
 コオニタビラコ 子鬼田平子  
 ノゲシ 野罌粟  
 カナムグラ 鉄葎  
 トキワハゼ 常盤はぜ  
 ムラサキサギゴケ 紫鷲苔  
 オオセンナリ 大千成  
 ホトケノザ 仏の座  
 トウバナ 塔花  
 キランソウ 金瘡小草  
 タツナミソウ 立浪草  
 キュウリグサ 胡瓜草

マルバルコウ 丸葉縷紅  
 コナスビ 小茄子  
 メマツヨイグサ 雌松宵草  
 コミカンソウ 小蜜柑草  
 ヌスビトハギ 盗人萩  
 ゲンノウショウコ 現の証拠  
 カタバミ 傍食  
 スペリヒユ 滑り菟  
 シロザ  
 オオイヌタデ 大犬蓼  
 イヌタデ 犬蓼  
 トクダミ  
 ツユクサ 露草  
 カヤツリグサ 蚊帳吊草  
 エノコログサ 狗尾草  
 メヒシバ 雌目芝  
 コメヒシバ 小雌目芝  
 イヌビエ 犬稗  
 コニシキソウ 小錦草  
 イヌホオズキ  
 ゴウシュアリタソウ  
 ザクロソウ 柘榴草  
 ヌカキビ 糠黍  
 カラスノゴマ 烏の胡麻  
 クワ  
 アサマフウロ  
 ヒメジョオン  
 シソ



人の手を入れない野生植物の保全地域  
 ここに多くの生命が宿る。泰孝記念館  
 横スペースを利用した野生植物自生地

これらの草花は全く人間の手を加えることなく成長し枯れていきました。つまりこのことは、この場所が生育に適していたということが言えます。植物はどんなに快適な場所でもそれぞれに適した場所でなければ繁殖しません。

また、カタバミなどはシジミ蝶の食草として知られており、現にシジミ蝶を確認することができました。次年度も引き続き調査・研究を行い、さらには温暖化との関係なども対象とし、発表を行いたいと考えております。

以 上



日本では雑草として扱われることの多いかたばみ

### 田辺光彰美術館より ～道具と精霊～

## 3. 田辺光彰美術館より～道具と精霊～

学芸員 田邊 陵光

田辺光彰美術館の収蔵品は田辺光彰が自身の彫刻を制作するにあたり、とても影響を受けたフィリピンの棚田に暮らす人々の日常の道具及び祭事関連の品々が常設展示となっております。フィリピンルソン島の棚田は世界遺産として登録されておりその大きさは、あぜ道をすべて繋ぐと地球を半周するといわれています。第一回の季刊誌発行に伴い、その道具達が持っている意味について考察します。

道具とは、人の生活をより快適にするために使用する補助的な品々だと考えます。農業に関する道具だけでも枚挙に暇がありません。鋤、鍬、鎌はてはトラクター、水牛なども道具と言えましょう。特に日本人は豊かな生活を送る中で、一つ一つの道具について深く考えることをしなくなっているように思えます。確かに高額な品で“一生もの”と呼ばれるものは存在します。しかしそれとは違った意味で、フィリピンの道具には様々な工夫により一生ものまたは何世代ものとしているようです。その例が当館の収蔵物の中にみとれます。右の写真はポータブルの椅子です。色々なところに持ち歩き楽に座れるよう湾曲したフォルムと四つの足がついています。

尾のついた携帯イスから  
読み解く  
ものを大切にする方法。



しかし、一見ただけで分かるように、尾のようなものが見受けられます。これは機能的には全く必要のないものですが、この尾をつけることにより愛着が増し、より丁寧な扱いがなされるようになります。

これらの道具を作り使っている人々は精霊信仰（アミニズム）と呼ばれる宗教観を持っています。古来日本でもアミニズムは盛んで、どんなものにでも精霊が宿るとされてきました。使い込まれた道具が最後には妖怪に転じるなどのお話もあります。

このような宗教観は道具を大事に扱う事への基本的な概念だと考えられます。右の写真は墨壺ですが、上段は日本の墨壺、下段はフィリピンの墨壺です。使用目的は同じですが日本の墨壺はその装飾が縁起物の“亀”に対しフィリピンのものは、より鮮明に精霊の像が彫ってあります。日本人からすると、やや不気味なものに見えますが、ここまですると捨てるに捨てられない、とても貴重な一品となり数世代に亘って使いつづけられることでしょう。

最後に当美術館の展示品は現在の我々の生活に示唆を与え、生きることへの努力や面々と繋がっていく人々の逞しさや、したたかさを感じられる構成となっております。一つ一つの作品をよくご覧になっていただければ、新たな発見があるかもしれません。



#### 日吉の森庭園美術館

223-0064  
横浜市港北区下田町3-10-34

#### 電話番号:

045-561-3214

#### FAX 番号:

045-561-3214

#### 電子メール:

hiyoshinomori@hb.tp1.jp

終わりに

今後一年を四半期にわけ、季節ごとに研究の成果を発表していこうと考えております。

四季折々自然はいろいろな姿を見せてくれます。一つ一つの植物や生き物が精一杯輝く季節が今ここに来ています。次回はもう少し収蔵物について研究を行いますのでご期待ください。

副館長 田邊美紗代